

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 7 月 6 日現在

機関番号：32715

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2019

課題番号：17K01150

研究課題名（和文）高校生の「コア」の力を育む大学・地域と連携したキャリア教育に関する研究

研究課題名（英文）Research on career education in collaboration with universities and regions to improve learning skills for high school students

研究代表者

荒木 淳子 (Araki, Junko)

産業能率大学・情報マネジメント学部・教授

研究者番号：50447455

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、導入が増えている学校と地域とが連携して行うキャリア教育プログラムについて、キャリア教育が生徒たちの学習やキャリア意識に与える影響を明らかにし、今後学校と地域とが連携したキャリア教育プログラムを開発するための示唆を得ることである。研究の結果、地域の大人や大学生との交流は中学生の自尊感情やライフキャリアレジリエンス、地域愛着を高めること、プロジェクト型の学習では、地域の大人や教員との交流が地域での活動と教室での学習を架橋することや生徒同士で対話しながらプロジェクトを進める経験が能動的な学習観をもたらすことなどが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、これまで実践者の経験や勘に基づいて行われていた中高等学校におけるキャリア教育プログラムの効果を学術的に明らかにしたことである。地域の大学生や大人との交流や活動は、生徒達の地域愛着を高め能動的な学習観につながることや、自尊感情、ライフキャリアレジリエンスを向上させることが明らかとなった。また本研究の社会的意義は、キャリア教育プログラムの課題から今後実践を行う上で留意すべき点についても明らかにしたことである。地域での学びを教室の教科科目での学びを結びつけるためにはプログラムの構成や教員の関わり方についても細かく検討していく必要がある。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research was to clarify the impact of career education on students' learning and career consciousness and get suggestions for program development. Recently, the number of schools is increasing which implement career education programs in collaboration with schools and communities, but the effects of these programs are not clear. As a result of the research, interaction with local adults and university students is to increase self-esteem, life career resilience and community attachment of junior high school students, and in project-based learning, interaction with local adults and teachers will help for bridging learning in local activities and classrooms. It was clarified that experiences to learn actively with classmates and local adults will change the image for learning of students more actively and autonomously.

研究分野：教育工学、キャリア教育

キーワード：キャリア教育 地域連携 自尊感情 ライフキャリアレジリエンス PBL 地域愛着 ラーニングブリッジング 対話

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

若年層の就職難が社会的問題となった1990年代以降、日本では若者に対するキャリア教育の必要性が指摘され、学校教育には生徒の勤労観・職業観を醸成するためのキャリア教育が求められるようになった(児美川2007)。この時期には中央教育審議会も、「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」という答申のなかでキャリア教育を「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」と定義し、幼児期の教育から高等教育に至るまでの体系的なキャリア教育を提言している。文部科学省高等学校教育部会もまた、「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」とともに、「社会・職業への円滑な移行に必要な力」や「社会の一員として参画し貢献する意識などの市民性」を高等学校で生徒に最低限修得させるべき「コア」の内容と定めるなど、研究開始当初は中学校、高等学校におけるキャリア教育の重要性が改めて確認された時期であった。

実践に目を向けても様々な学校で総合的な学習の時間などを用い、学校が地域と連携して行うプロジェクト型のキャリア教育プログラムが実施されていた。しかし、大学での高等教育においては学生の能動的な学びやサービス・ラーニング、PBL(Problem/Project based learning)の実践や研究が進み、地域での活動が学生の市民性獲得や深い学びにつながる事が明らかとなっている一方、中学校や高等学校において学校が地域と連携して行うプロジェクト型のキャリア教育プログラムについては、その学習効果についてはほとんど明らかにされていない。そこで研究開発当初は、中学校、高等学校において学校が地域と連携して行うキャリア教育プログラムについて、その取り組みだけでなく学習効果についても明らかにし、今後様々な学校で取り入れられるようにしていくことが求められると考えた。

### 2. 研究の目的

研究では当初、高等学校において学校が地域と連携して行うプロジェクト型のキャリア教育プログラムを開発し、その効果を測定することを目的としていた。しかし地域と連携して行うプロジェクト型のキャリア教育プログラムを開発する前に、本研究では、まずその取り組みについて調査し、学習効果を明らかにすることを目的とした。これまで実践では様々な事例が報告されているものの、それらが本当に生徒の成長やキャリア教育としての効果を持つものであるかどうかについてはほとんど明らかにされてこなかった。このため一部の学校は、地域と連携したプロジェクト型のキャリア教育プログラムに熱心に取り組む一方で、こうしたプログラムは、生徒の多くが大学進学を目指すような普通科の高等学校にはなかなか浸透してこなかったと考えられる。

### 3. 研究の方法

研究方法は、研究協力の得られた岡山県の県立高等学校A校、B校において、それぞれの学校が地域と連携して行っているプロジェクト型のキャリア教育プログラムについて調査を行った。また、岡山県内で学校と地域の大人を結び付けた対話型ワークショップを実施しているNPO法人だっぴにも研究協力を得て、実践に関する評価研究を行った。

A校では、実践のフィールドワークと事後にインタビュー調査を行った。またA校のキャリア教育プログラムの企画、運営を行う担当教員へのインタビュー調査も併せて実施した。B校では、1年間のキャリア教育プログラムが終了した後に、1,2年生全員に対する事後アンケート調査を実施した。また、アンケートで協力が得られた高校生8名に対し、1年間の活動についてそれぞれ1時間ほどの半構造化インタビュー調査を実施した。NPO法人だっぴの実施する「中学生だっぴ」については、平成29年度にNPO法人だっぴが実施した事前事後アンケート調査の結果を分析した。また、令和2年1月に岡山県内の2つの中学校で実施された中学生だっぴについては、「ライフキャリア・レジリエンス」と「自尊感情」に着目する事前事後質問紙を作成し、事前事後のアンケート調査を実施したほか、B校では実践に参加した中学2年生に、実践後、だっぴに参加した感想や仕事・働くことに対する考えについて200字程度の作文を書いてもらった。

### 4. 研究成果

岡山県の県立高等学校A校、B校のフィールドワークとアンケート調査、インタビュー調査では、学校が地域と連携して行うキャリア教育プログラムでは、生徒達が市役所や大学教員、自治会の役員や地元の住民など様々な大人達と交流を行うことが、生徒達の視野を広げ、進路選択に影響を与えていることが明らかとなった。また、生徒同士が協働してグループ学習に取り組む過程で、生徒達が先輩や同級生を観察することで学んでいることや、仲間と一緒にパソコンを用いた学習を行うことによって、学習観が変容していることなどが示唆された。またキャリア教育プログラムを実施する教員には、地域の大人達と生徒をつなげ活動をデザインする、コーディネーターとしての役割が求められることも明らかとなった。A校、B校のフィールドワークに関する結果をまとめた記事は、『月刊高校教育』2019年11月号の「管理職のためのアクティブ・ラーニング入門」に掲載された。

また、NPO法人だっぴの「中学生だっぴ」については、事前事後のアンケート調査結果の分析から、だっぴに参加した中学生たちは、地域の大人や大学生たちと対話を行うことを通じ、地域への愛着、自分の進路に能動的に関わろうとする意欲、様々な人と関係を持つことへの意欲などが有意に向上することが明らかとなった。令和2年1月に岡山県内の中学校2校で実施され

た中学生だっぴの事前事後アンケート結果の分析においても、だっぴに参加することで、生徒たちの「ライフキャリア・レジリエンス」と「自尊感情」は有意に向上していた。また、B校の事後作文をカテゴリー分析した結果、だっぴにおいて地域の大人達や大学生に否定されることなく自分の考えや意見を受け入れてもらえたという経験や、だっぴを通じて様々な大人達の考え方や経験に触れることができたこと、特に成功体験だけでなく、失敗体験も含めて知ることができたことが生徒達のライフキャリア・レジリエンスや自尊感情を向上させたことが示唆された。これまでもライフキャリア・レジリエンスや自尊感情については、人との関係性の中で高まることや、家庭や学校、地域が連携することの必要性が指摘されている。中学生だっぴは、こうした場を中学生に提供することができるのだと考えられる。

NPO法人だっぴの実践に関するこれまでの評価研究の成果は、「地域の大人との対話が中学生のキャリア意識に与える影響 NPO法人だっぴの実践を事例として」として、研究誌『キャリアデザイン研究』15号の研究ノートとして採録された。また令和2年1月に実施した実践に関する評価研究の成果は、「地域の大人との対話が中学生のキャリア意識に与える影響の分析 ライフキャリア・レジリエンスと自尊感情に着目して」として、日本教育工学雑誌のショートレターに投稿し、現在査読中である。

以上

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 荒木淳子・高橋薫	4. 巻 11月号
2. 論文標題 管理職のためのアクティブ・ラーニング入門 学びのプロセスの大切さ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 月刊高校教育	6. 最初と最後の頁 60-63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 荒木淳子・高橋薫・佐藤朝美	4. 巻 15
2. 論文標題 地域の大人との対話が中学生のキャリア意識に与える影響	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 キャリアデザイン研究	6. 最初と最後の頁 169-176
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 荒木淳子、高橋薫、佐藤朝美
2. 発表標題 地域と連携したキャリア教育プログラムにおける高校生の学びと 学習を架橋する活動に関する研究
3. 学会等名 日本教育工学会第34回全国大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	佐藤 朝美  (Sato Tomomi)  (70568724)	愛知淑徳大学・人間情報学部・准教授         (33921)	

## 6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	高橋 薫  (Takahashi Kaoru)  (70597195)	早稲田大学・人間科学学術院・准教授（任期付）    (32689)	